

コミュニケーションの回帰性をめぐって

——ルーマン・コロキウム再訪——

高橋 徹

- 1 学際的なテーマとしてのコミュニケーション
- 2 ルーマン・コロキウム開催の経緯
- 3 コミュニケーションの回帰性をめぐる対話

1 学際的なテーマとしてのコミュニケーション

20世紀後半の社会科学において、コミュニケーションは学際的な地平に立って自らの根本問題を考えるための中心的なテーマの一つとして浮上している¹⁾。その背景には、第二次大戦時から戦後にかけてアメリカで起きたサイバネティクス、コミュニケーション（通信）理論の発展がある。親族体系・経済体系・言語体系の形成をそれらに固有のコミュニケーションにおいて捉えようとしたクロード・レヴィ＝ストロース（Claude Lévi-Strauss）は、社会科学にとってもっとも重要な著作としてノーバート・ウィーナー（Norbert Wiener）の『サイバネティクス』（1948年）、クロード・シャノン（Claude E. Shannon）とワレン・ウィーバー（Warren Weaver）の『通信の数学的理論』（1950年）を挙げている（Lévi-Strauss 1958=1972:309）²⁾。シャ

1) この点については、別稿でも論じた（高橋 2000）。

2) 参照する外国語文献で邦訳書のあるものは参照し、該当頁数を割注に示す。ただし、引用文についてはかならずしも邦訳書にはしたがっていない。引用文中の〔 〕内は引用者による挿入である。

ノンの理論を解説したウィーバーは、コミュニケーションを、会話、文書の取り交わし、芸術作品の制作、身体的なパフォーマンスを含める広い意味で捉えており、技術的な通信論を越えて人間の行為全般を捉える射程を示している (Shannon and Weaver 1998:3=2009:15-16)。

このような視座の拡張は、サイバネティクスにおいても起きている。1970年頃にゴードン・パスク (Gordon Pask)、ウンベルト・マトゥラーナ (Humberto Maturana)、ハインツ・フォン・フェルスター (Heinz von Foerster) らによってサイバネティクスの枠組みに再帰的な観察の視点が導入されている³⁾。つまり、制御過程だけを端的に記述するのではなく、その制御過程に対する観察者の観察をもまた制御過程全体の一契機として組み込むことを提案したのである。このような再帰的な視座を組み込んだサイバネティクスを、フォン・フェルスターはセカンドオーダー・サイバネティクス (second order cybernetics)、あるいはサイバネティクスのサイバネティクス (cybernetics of cybernetics) と呼んでいる (von Foerster 2003b: 286)。これによってサイバネティクスは、制御過程に観察する者と観察される者の関係を持ち込んだわけだが、制御過程で稼働する単位がそれぞれに観察能力を持っていれば、観察者／被観察者の関係はいつでも入れ替わりうるものとなる。こうした展開によってサイバネティクスは、コミュニケーション的な関係をモデルとして構想する枠組みを手に入れ、社会科学の問題領域に足を踏み入れている⁴⁾。

一方、社会学においては、1950年代にタルコット・パーソンズ (Talcott Parsons) が自我と他我の行為選択が相互に依存していることを示す二重の条件依存性 (double contingency) を定式化し、これを社会関係の基本的な条件と考える体系的な理論の構築を試みた (Parsons 1951=1974)。この二

3) この点に関する議論を概観したものとして、von Foerster (2003b) 参照。

4) 1970年代には、社会科学とサイバネティクスのハイブリッドとしてソシオサイバネティクス (sociocybernetics) という研究領域が形成されている。その経緯については、赤堀 (2017) 参照。

重の条件依存性として描かれる自我と他我の相互規定的関係は、パーソンズによる本格的なコミュニケーション論の出発点となることはなかったが、それを独自の再定式化によって引き継いで社会的なコミュニケーション論として展開したのがニクラス・ルーマン（Niklas Luhmann）の社会システム論であった（Luhmann 1984=1993, 1995）。パーソンズからルーマンに至る社会システム論は、社会学においてサイバネティクス、コミュニケーション論ともっとも積極的に対話を行った理論的系譜といえるだろう⁵⁾。本稿では、こうした研究史をふまえて、その後の展開の一端を明らかにするため、1990年代にフォン・フェルスターとルーマンによるセカンドオーダー・サイバネティクスと社会学の立場からの理論的な対話を振り返り、両者がコミュニケーションという事態をどのように捉えたかを示すとともに、コミュニケーションというテーマが今日的な状況において内包する課題について考察を行うことにしたい。また、両者の対話に関する資料調査の過程で明らかになったもう一つの（しかし、実現することのなかった）対話、すなわち、コミュニケーションをめぐるジャック・デリダ（Jacques Derrida）とルーマンの対話についても当時の資料や関係者の証言から知りえたことを研究史上の記録として記しておきたい。

2 ルーマン・コロキウム開催の経緯

まずは、フォン・フェルスターとルーマンの対話が成立するに至った経緯をたどってみることにしよう。1993年2月5日にその年でビーレフェルト大学を定年退職するニクラス・ルーマンの65歳の誕生日を祝うかたちで

5) ルーマンの理論とサイバネティクスの関係については、赤堀（2021）が詳しい。コミュニケーション論の文脈では、グレゴリー・ベイトソン（Gregory Bateson）やポール・ワツラウィック（Paul Watzlawick）らの著作（例えば、Ruesch and Bateson（1951=1995）、Watzlawick et al.（1967=1998））が重要である。

ルーマンと彼にゆかりのあるゲストを招いたコロキウムKommunikation und Gesellschaft: Autorenkolloquium mit Niklas Luhmannが同大学の学際研究センター (Zentrum für interdisziplinäre Forschung, 以下ZiFと略す)⁶⁾で開催された⁷⁾。

ルーマンの退職を翌年に控えた1992年1月に、コロキウムの企画者であったディルク・ベッカー (Dirk Baecker) はZiF側とコンタクトを取り始めている⁸⁾。企画者のグループは、ベッカーに加えて、ヘルムート・ヴィルケ (Helmut Willke), ハルトマン・ティレル (Hartmann Tyrell), アンドレ・キーザリング (André Kieserling) によって構成されていたが、ZiF側との交渉は主にベッカーが担っていたようである。コロキウムに招待するゲストスピーカーについて、ルーマンと相談をしたベッカーは、社会学者のアンソニー・ギデンズ (Anthony Giddens), 組織学者のカール・E・ワイク (Karl E. Weick), 法学者・裁判官のディーター・グリム (Dieter Grimm), 政治学者のアロン・ウィルダフスキー (Aaron Wildavsky), 哲学者のジャック・デリダにそれぞれ招待状を送っている。

コロキウムの企画者であるベッカーが書いた招待状で興味深いのは、それぞれの招待者にどのような役割が期待されたか、という点である。その

6) ZiFは、1969年のビーレフェルト大学の設立当初に設置された研究機関で、同大学およびドイツ国内外の研究者が参加した研究プロジェクトを多数推進してきた。また同研究センターには、1978年から1984年にかけてノルベルト・エリアス (Norbert Elias) が、事実上唯一の無任期研究員として滞在していた。

7) ニクラス・ルーマン教授は、1982年の来日時に「コンフリクトと法規範 (Konflikt und Rechtsnorm)」と題して中央大学日本比較法研究所にて講演を行っている。その原稿は、同研究所の機関誌『比較法雑誌』に掲載され、翌年、他の講演原稿とともに翻訳が刊行されている (Luhmann 1982=1983)。

8) 以下、本コロキウムの企画の経緯に関しては、ディルク・ベッカー氏が関係者と交わした書簡に基づく。書簡は、ZiFの付属図書室に保管されていたもので、閲覧にあたっては司書のラインヒルト・ドルケマイヤー (Reinhilt Dolkemeier) 氏にご助力をいただいた。また本稿をまとめるにあたって、ベッカー氏に直接コンタクトをとり、確認した点もある。なお、敬称等は適宜略させていただきます。

概略を記しておこう。まず、ギデンズには「社会の理論」について話をすることを提案している。ルーマンは、貨幣、愛、権力のようなコミュニケーション・メディアが社会の秩序形成において機能していると考えているが、「脱埋め込みメカニズム（disembedding mechanisms）」に関するギデンズ自身の議論をルーマンのそれとどのように関連づけるかについて話をしてほしいとベッカーは依頼している。著名な組織論者であるワイクに対しては、組織論における開放システムから閉鎖システムへの「パラダイム・チェンジ」について話してほしいと述べ、組織を作動的に閉じた一つのオートポイエシス・システムとして記述することにどのような利点があるだろうか、という問いに対する示唆を求めている。グリムに期待されたのは、社会における国家と政治の関係というテーマである。これは、社会のなかに政治を（そして「国家」を政治システムの自己記述と）位置づけるルーマンのパーспекティヴをふまえたものだが、当時、ドイツ連邦憲法裁判所裁判官を務めていたグリムには憲法論の観点からこのテーマについて語ってもらうことを依頼している。コロキウムが開催された1993年は、ルーマンのリスク論（『リスクの社会学（*Soziologie des Risikos*）』）の英語版の刊行が予定されていた。ベッカーはその機をとらえてウィルダフスキーに、様々なテクノロジーの導入に伴うリスクの問題が高まっている状況をふまえて政府によるリスク対処の問題について話をしよう依頼している。

他の招待者に期待された役割が比較的明確であるのに対して、ベッカーはルーマンとデリダの関係について比較的多くの言葉を費やしている。いわく、両者の間には似通った問題に異なるアプローチで取り組んだという意味で比較可能性があり、この点がビーレフェルトにいる自分たちからみて魅力的なテーマだというのである。具体的にそれが現れているテーマとして、ベッカーは、フッサールによる記号批判、パラドックス、決定不可能性、法のパラドックスを挙げている。興味深いのは、ルーマンとデリダの間になぜこのような比較可能性が生じているかという点である。その理由として、ベッカーは次の二点に言及している。一つは、自己言及的で回

帰的な操作としてのコミュニケーション (communication comme opération autoréférentielle et récursive) の概念であり、もう一つは、排除すると同時に、排除されたものを包摂されたものに再導入する操作子としての区別 (distinction) のはたらきである。後者の「区別」は、明らかにジョージ・スペンサー＝ブラウン (George Spencer-Brown) の形式の算術 (Spence-Brown 1969=1987) を念頭においたものである。ここでは詳述できないが、ルーマンとデリダに共通するモチーフとして指摘されている自己言及的、回帰的コミュニケーション概念と区別のはたらきは、後にベッカー自身が展開するコミュニケーション理論 (Baecker 2005) の核心的なモチーフともなっている⁹⁾。このように数多くの興味深い論点を含むであろうデリダの講演にベッカーが期待したのは、デリダ流のコミュニケーション論の開陳とそれをめぐるルーマンとの対話であった¹⁰⁾。

だが、こうしたベッカーら企画者のはたらきかけは、残念ながら実を結ぶことはなく、実際のコロキウムは最初の企画案とはかなり異なるものとなった。当初の招待者のなかで当日来場したゲストとして記録されているのは、グリムとウィルダフスキーだけであった (ZiF 1993; 1994)。参加が実現しなかったギデンズ、ワイク、デリダに代わって名を連ねているのが、サイバネティクス学者のハインツ・フォン・フェルスター、文学研究者のハンス・U・グンブレヒト (Hans U. Gumbrecht)、行政社会学者のレナーテ・マインツ (Renate Mayntz) であった。ZiFの年報に掲載されたベッカーによる開催報告 (ZiF 1994) は、コロキウムにおいて「コミュニケーション」と「社会」をキーワードとして、観察者 (そして観察者が構築する理論) は

9) ベッカーのコミュニケーション論については、別稿で論じた (高橋 2021)。

10) ベッカーは1992 / 93年度はデリダを招待する格好のタイミングと考え、コロキウムのゲストに加えることをルーマンに相談したという。実際、後述するように、ルーマンはこの時期にデリダに会っており、またアメリカで行った連続講演の中で「脱構築 (deconstruction)」について論じている (注12, 15 参照)。

つねに社会の内部にあり、回帰的な観察のネットワークから逃れえないという条件のもとで、我々が暮らしている社会はいかなる社会であるかという問いにどのような回答をみいだすかをめぐって議論が行われたことを記している。

コロキウムにおいて行われた議論で、ルーマンによる応答も含めてその詳細な内容が公表されているのは、フォン・フェルスターの講演とルーマンによるリプライである。両者の対話を記録した原稿は、最初にイタリアのウルビーノ大学が発行している紀要*Teoria Sociologica* (1993年)にエレナ・エスポジト (Elena Esposito) の編集で掲載されている¹¹⁾。自身の編集号によせた序文のなかで、エスポジトは、セカンドオーダー・サイバネティクスの「父」であるフォン・フェルスターが、ルーマンが格闘したコミュニケーションの中核の問題に取り組んでいる点にこの講演の重要性をみいだしている (Esposito 1993)。結果として1993年のコロキウムでは、デリダとの間で実現しなかったコミュニケーションをめぐる対話が、フォン・フェルスターとの間で実現したわけである¹²⁾。

-
- 11) 初出の掲載原稿を入手するにあたって、ウルビーノ大学のファビオ・ジリエット (Fabio Giglietto) 氏の助力を得た。その後、両者の対話は、Ofak und von Hilgers hrsg. (2010) に再録されている。また、フォン・フェルスターの講演原稿 (von Foerster 1993) の英語版が、von Foerster (2003a) である。本稿では、ルーマンによるリプライ (初出は、Luhmann (1993a)) も含めて、入手が比較的容易な2010年の再録版を参照し、その頁数を割注に示す。
 - 12) このコロキウムへの招待状が送られた1992年の秋に、デリダはニューヨークのカルドーブ・ロースクールで開催されたセミナーでルーマンと同席し、興味深いやりとりを残している。そのセミナーに参加していた哲学者オーレ・ティッセン (Ole Thyssen) の回想によれば、デリダは「コミュニケーション」という言葉にいらだちをおぼえていたようであり、ルーマンに対して他者というものは作り出されるものではなく端的に出会うものであり、それが倫理、正義、そして政治の出発点であることを強調したという。また差異について、ルーマンはシステムがそれを用いて境界を作り出すことに関心を向けたのに対して、デリダはシステムが差異をつくり出すことがあったとしても、同時にシステム

3 コミュニケーションの回帰性をめぐる対話

1 ルーマンが投げかけた二つの問い

講演者として登壇したフォン・フェルスターは、まず1991年に彼自身の80歳の誕生祝いとしてルーマンから寄せられた論考 (Luhmann 1991) に言及し、そこで二つの「常軌を逸した問い」(außerordentlichen Fragen) を提起されたことを披露する。その問いは、一つには認識 (Erkenntnis) の問題である。社会学者であるルーマンがもっとも力を入れて論じてきたのは、社会システムであった。社会システムは、コミュニケーションにコミュニケーションが接続することで独自の現実 (社会的現実) を構成する社会的過程である。社会システムが行う環境についての認識もまたそのような過程 (例えば、地球温暖化についての議論) によって形成される、というのがルーマンの考えであった。こうしたことは、思考が次々に接続することで進行する人間の意識過程についてもいえる。したがって、認識とはこのようなシステムによる現実構成の営みにほかならないのではないか、というのがフォン・フェルスターの誕生日に寄せてルーマンが提起した一つ目の問いである。ルーマンはここで、認識の担い手を人間のみならず社会システムへと拡張しているわけだが、これはフォン・フェルスターの立場とは相容れない「常軌を逸した」ことだったのである¹³⁾。

自体が差異によって作り出されることを受け入れなければならない、と述べている (Thyssen 1999:144)。他者や差異に端的に出会うことから出発するデリダとシステムの作動を観察することに関心を示すルーマンとの対話はすれ違いに終わったのだが、倫理的次元をはらんだ両者の視点の相違は、フォン・フェルスターとルーマンの対話において、いわばかたちを変えて繰り返されており、本稿にとっても重要な示唆をもたらしている。ティッセンの回想については、酒井泰斗氏、三谷武司氏よりご教示をえた。

13) この点については、Luhmann (1991:67,73) を参照。こうしたルーマンの立

続いてルーマンが提起したのは、潜在性の問題である。社会学は、例えば潜在的機能の問題として以前からこれに取り組んできた（Merton 1957=1961）。その意味で、この問題は社会学の古典的な問いの一つといえる。彼は潜在性を、観察に不可避免的に伴う盲点として捉えようとした。こうした発想は、「人は自分自身にみえていないものがみえていないことをみることができない」という観察の盲点をめぐるフォン・フェルスターの洞察からも示唆を受けている¹⁴⁾。彼の代表的な著書*Observing Systems*（1981年）のタイトルとして掲げられた言葉もまた、その両義性によって観察者を観察することを促している。明らかなように、この言葉を「観察するシステム」と読めばシステムは観察する主体となるが、「システムを観察する」と解すればシステムは観察の対象となるわけである。

それでは、観察者を観察するとき、我々は何を観察することになるのだろうか。ルーマンはここで「観察する」という行為を、スペンサー＝ブラウンの議論をふまえて、区別を用いて「何かを表示する」操作として定式化する。つまり、何らかの対象を観察するとは、区別を用いてあるものを他のものから区別して表示することにほかならない、ということである。アリストテレスの『命題論』で用いられた例を引き合いに出しながら、彼は次のように説明する。人が「海戦」について言及するとき、つねにそれとは異なる他の何か（例えば、「陸戦」、「海洋貿易」）との区別が潜在的に行

場は、コミュニケーション・システムを独自の「観察者」とみなしうるか、という論点をめぐって示されている。本文でこの後すぐに説明する観察概念は、こうした「観察者」の拡張を可能にするものとして導入されている。

- 14) Luhmann (1991:61) 参照。例えば、フォン・フェルスターは次のように述べている。「我々がみえていないものを我々はみえていない。これを私はセカンドオーダーの欠陥と呼びたい。このような欠陥を克服するためには、セカンドオーダーの治療をもってするしかないのである」(von Foerster 2003b:284)。しかし、セカンドオーダーの観察自体もまたファーストオーダーの観察である限り、そこに新たな潜在性をつくり出す。彼のいう「セカンドオーダーの欠陥」は、根治しえないのである。

われている。人は区別の反対側にあるものをつねに思い浮かべているわけではない。しかし、「海戦」と対比される戦鬪の形態として「陸戦」に言及する可能性はつねに伏在している。そして、区別の反対側にある「陸戦」への言及が行われると、「海戦」についての言及は、「海戦／陸戦」という区別を用いた観察として観察されることになる。ここで重要なのは、最初の観察が行われた時点では、どのような区別を用いて「海戦」が観察されたかは明らかではないということである。いいかえれば、最初の観察において用いられた区別は、潜在的なものにとどまっている。

このような区別の潜在性は、フォン・フェルスターの用語を用いていえば、「海戦」について言及するファーストオーダーの観察（最初の観察）において区別は潜在的なものにとどまることを意味する。それでも、このファーストオーダーの観察を対象とするセカンドオーダーの観察では、「海戦／陸戦」という区別を明るみに出すことができる¹⁵⁾。しかし、このように観察の対象となることで把握されることのない潜在的区別、あるいは、観察しえないものを観察するたえざる試みがなされても、その試練に耐えて機能し続けるような潜在的区別というものを想定しうるだろうか、という問いをルーマンは提起する。彼はこの問いを、フォン・フェルスター自身の言葉を用いて、潜在領域における「固有价值」（この言葉については次節で説明する）の形成を我々は想定しうるのだろうか、という問いとして彼に投げかけたのである。この問いは、フォン・フェルスターにとっては予期しないものであったのではなかろうか。

15) 前述したように、ルーマンは、1993年にヴァージニア大学に招かれて行った講演に基づく論考において、脱構築について論じている。彼はその論考で、ニーチェ、ハイデガー、デリダによって試みられたヨーロッパの形而上学的伝統の脱構築は、伝統による拘束を解き、多様性へと向かう巨大な潮流の一部であると位置づけている。そして、脱構築を社会の観察に対する（つまりは、そこで用いられている区別に対する）セカンドオーダーの観察として遂行することを提案している (Luhmann 1993b)。

2 フォン・フェルスター講演「コミュニケーションはいかに回帰的であるか」

さて、このような問いにフォン・フェルスターは、どのように答えたのだろうか。彼は、ルーマンの誕生日を記念するコロキウムに招待された際に、自身の誕生日を記念して贈られたこれら二つの問いに答えるを思いつき、腰を落ち着けて取り組んでみたという。しかし、これらの「常軌を逸した問い」に答えることは容易ではないことを悟った彼は、「ちょっとまで、ハインツ」と自らを思いとどまらせたと言るのである。聴衆を楽しませようとするサービス精神が旺盛なフォン・フェルスターは、そんなふうにより自身の様子を少しばかり戯画的に語ってみせたわけだが、実際のところ彼は「何を話そうか」と思案に暮れる必要はなかったのである。なぜなら、コロキウムの主催者によって、あるテーマが提示されていたからである。それが、コミュニケーションの回帰性の問題である。具体的に彼に与えられたテーマは、“Wie rekursiv ist die Kommunikation?”という問いについて語ることであった¹⁶⁾。フォン・フェルスターは、この問いを彼らしく多義的に読もうとする。果たしてこの問いの力点はどこにあるのか？「いかにして (wie)」なのか、「回帰的 (rekursiv)」なのか、それとも「である (ist)」なのか？「存在論者」ではないと自認するフォン・フェルスターは、コミュニケーションがそもそも回帰的「である (ist)」か否かという問いを立てることを除外し、「コミュニケーションを回帰として捉えるならば、コミュニケーションはいかにして回帰的となるか」と問うことを宣言する。

フォン・フェルスターは、回帰性の問題を考えるためのモデルの構成要

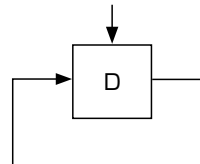
16) この問いを発案したのは、企画者の一人であるベッカーであった。彼によれば、この問いはフォン・フェルスターの講演タイトルとして指定したものではなく、フォン・フェルスターを招くに当たってぜひ彼と意見交換をしたいテーマとして提示したものであったという。

素として、回帰的な関係を形成する「機械 (Maschinen)」について考えることから始めている。この機械は、二つのタイプに分かれる。一つは入力に対してつねに規則的な出力をする。例えば、入力された値につねに2を加えて出力する計算機のようなものである。このような単純で出力結果が予測可能な機械を、彼はトリビアル・マシン (Triviale Maschinen) と呼んでいる。これに対してもう一つのタイプの機械は、内部の状態がつねに変化しており、出力結果を予測することができない。例えば、入力された値に加算する値自体がつねに変動しているような機械である。彼はこのような機械を、非トリビアル・マシン (Nicht-Triviale Maschinen) と呼んでいる。フォン・フェルスターは、こうした道具立てを使い、数学的な計算例も示しながら議論を展開するが、ここでは社会学的な問題関心に即して、この機械モデルを人間にあてはめながら彼の議論を概観しておくことにする。

フォン・フェルスターによって導入された二つの機械モデルを人間にあてはめるとき、まずいえることは、人間は非トリビアル・マシンとみなすのが適当だということである。なぜなら、人間においては感情や関心、体調など内的な状態はつねに変動しており、トリビアル・マシンのような作動をすることはないからである。だからといって、人間はまったく予測不可能な行動をするわけではない。個人の水準では「性格」と呼ばれる出力の規則性がみられるし、コミュニケーションの水準においても礼儀やマナーのような規則性がみられる。それでは、非トリビアル・マシンにおいて、このような規則性はいかにしてもたらされるのであろうか。

ここでフォン・フェルスターは、興味深い操作を行っている。機械の出力をふたたびその機械に入力する回帰的なモデルを作ったのである (図1) (Ofak und von Hilgers hrsg. 2010: 36)。実際、人間に置き換えてみても、人は自分のふるまいを自覚し、反省的に認識することができる。そ

図1 回帰的な機械

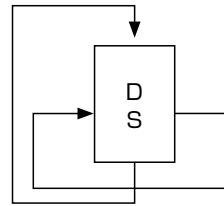


の意味で、人間もまた自己の出力を回帰的に自己へ入力する機械だといえる。フォン・フェルスターは、この回帰的な処理について、一つの命題を提起している。つまり、回帰的な処理はそれを続けるうちに一定の定常値をもたらすのだ、という命題である。彼は、平方根の回帰的な算出を例にとって次のように述べている。「例えば、ランダムに決めた初期値の平方根を回帰的に取った場合（大抵の計算機には平方根のボタンがついていますね）、たちまち定常値 1.0000 に到達するでしょう。ルート 1 は 1 ですから、驚くことではありません。世紀の変わり目の数学者たちは、この値を当該の関数の『固有値 (Eigenwerte)』と呼びました」(Ofak und von Hilgers hrsg. 2010:37)。しかし、実際になんらかの「固有値」がえられたとしても、その「固有値」が回帰的な処理によってもたらされたこと以外のことは、我々にはわからないのだとフォン・フェルスターは指摘する。回帰的な平方根の算出過程を例に取れば、初期値を設定して計算を続けると何ステップ目かには定常値 1 に到達する。この 1 という定常値には、初期値を変えても同じように到達する。だとすると、1 という定常値から遡及してどのような初期値がこの定常値をもたらしたのかを推測することは不可能だということになる。つまり、回帰的な処理が何らかの定常値をもたらす可能性を想定することができたとしても、えられた定常値からそれをもたらした初期値を遡及的に導き出すことはできないわけである。フォン・フェルスターは、そこから「固有値が出現するというこの帰結こそが、我々があてにできる唯一のこと」(Ofak und von Hilgers hrsg. 2010:38) だと結論づけている。

さて、次に問題となるのはコミュニケーションである。先ほどの議論では、回帰的な処理をする機械を単体として問題にしてきたが、ここからは複数の機械が形成する回帰的な処理を問題にしなければならない。フォン・フェルスターは、複数のシステムが形成するシステム（システムのシステム）がいかにして形成されるのかという問題を複合 (Komposition) の問題と呼んでいる。そしてこの複合の例を、先ほどの機械モデルを使って図2のように示している (Ofak und von Hilgers hrsg. 2010: 39)。この図で

は、DとSという二つの機械が複合を形成している。DとSはそれぞれ自らの出力をそれぞれ自体へと入力する回帰的な処理を行うと同時に、他方の出力を自らに入力して処理している。

図2 回帰的な機械の複合



社会学者にとって興味深い問題は、このような回帰的な複合関係もまた、フォン・フェルスターのいう「固有値」を生み出すのかということである。彼は、「どのような作動的に閉じたシステムにおいても、固有行動が生じる」(Ofak und von Hilgers hrsg. 2010:43)として、聴衆である社会学者たちに自身の議論のインプリケーションを解説する。コミュニケーションする人間が、図2に示したような二重の回帰性を形成し、その営みが継続するとき、その行動に「規則性、つまり行為の時間的過程における『不変項』」がみいだされるだろうとフォン・フェルスターは語る。以上の議論を終えた彼は、結論として、一定の予測可能性・規則性を伴って進行するコミュニケーションという現象の核心を次のような命題に置き換えて表現している。「コミュニケーションは、それ自体に向けて二重に閉じている、回帰的に作動するシステムの固有行動である」(Ofak und von Hilgers hrsg. 2010:44)。この命題はあくまで図2に示された二者によるもっとも基本的な関係について述べたものであるが、三者以上のさらに複雑な関係においても、回帰性が予測可能な定常的行動をもたらすのだとフォン・フェルスターは示唆している。講演のなかで彼は、(一人ひとりが行動の予測が困難な非トリビアル・マシンであるはずの)聴衆の「全員が九時ぴったりに」会場に集まって、コロキウムが開催できていることに驚いてみせ、「いったいどうやってこれが可能になっているのでしょうか?」と問いかけている(Ofak und von Hilgers hrsg. 2010:34)。彼はこの問いに自ら答えて、それぞれのシステムが回帰的に作動しているからこそ、このようなことが可能なのだと語っている。

ここに至るまでのフォン・フェルスターの話は、ユーモアに富み、聴衆を楽しませようとするものであった。しかし、冗談めかして話したことのなかにもこの講演を理解する重要な示唆が含まれている。彼は講演の序盤で、サイバネティクスの大家であるフォン・フェルスターの洞察に富む話を期待して耳を傾けている聴衆に対して、「私の講演の最後に至っても、皆さんは回帰やコミュニケーションについて何も知らないでしょう。けれども、皆さんは私については何かを知ることになるでしょう！」とって驚かせている（Ofak und von Hilgers hrsg. 2010:29）。この話の含意を読み解くには、フォン・フェルスター自身を回帰的な処理をする非トリビアル・マシーンに置き換えてみるのがよい。彼はコロキウムに招待され、自問自答しながら回帰的な処理を行い、何を話そうか思案した。その一方で、主催者側とのコミュニケーション（そこには友人ルーマンとの仮想的な対話もあったかもしれない）、そして当日の聴衆との当意即妙のやりとりを経て、現在我々がテキストとして読む講演の内容が生み出されたのである。つまり、彼の講演自体、フォン・フェルスターが述べた意味での「コミュニケーション」の産物である。つまり、彼は「コミュニケーションとは何か」ということを講演の内容によって示したというよりも、演者としてコロキウムに臨んだ彼の思考とコミュニケーションの過程を聴衆に示すことで、コミュニケーションがいかに作動するものであるのかを身をもって示したのだといえる。

最後にフォン・フェルスターは、回帰的な相互作用としてのコミュニケーションが可能になることで、「行為の自由は私たちのもとに戻り、行為の責任もまた私たちのものになりました」（Ofak und von Hilgers hrsg. 2010:44）と語り、講演を締めくくっている。彼はここで、自らのサイバネティクスのコミュニケーションモデルから倫理的な含意を引き出している。回帰的に作動する非トリビアル・マシーンが、なんらかの決定を下したり、規則的な行動パターンを形成したりしたとしても、それがいったい何によってもたらされたのか、その原因を特定することはできない。せいぜいいえ

るとすれば、それらの「固有价值」は、非トリビアル・マシーンが関与した回帰的な過程によってもたらされたということだけである。「固有价值」の形成の（あるいは形成できなかったことの）理由を他の何かに帰属できないのだとすれば、結局のところそれは当該の非トリビアル・マシーンに帰属するしかない。それは、（こういってよければ）その非トリビアル・マシーンがどのように生き、何をなしたかを知ることにはほかならない。フォン・フェルスターが、講演を聴くことで「皆さんは私については何かを知ることになるでしょう！」と聴衆にいつてきかせたのもそのことである。彼にとって、「自由」とは他の何かに帰属できないこのような条件で行為することなのである。

3 ルーマンの応答

フォン・フェルスターの講演に応答をすべく登壇したルーマンは、彼との対話がどれほど魅力的で、謎めいたものであるかを理解してもらえたのではないかと語る。フォン・フェルスターは、我々が非トリビアル・マシンの振る舞いについて基本的な無知を抱えていることを示したが、同時に、我々がそのような無知を抱えていることを知っていることは一つの慰めであるという。なぜなら、こうした無知の知は、我々がそのような無知を抱えつつも何ができるのかという問いに取り組むための出発点となるからである。歴史の具体的事実の豊穡さに比べて内容は乏しいが、その代わりに概念としての明証性を確保できる理念型をマックス・ヴェーバー (Max Weber) が用い、諸変数の複雑な連関をそのまま分析する代わりに「次善策」としてパーソンズが構造-機能分析を行ったように社会学はこれまでも何かを十全には知り得ないときに、その代わりにできる探究 (《Stattdessen》-Argument) を行ってきた。しかし、社会学はそのような取り組みにおいて数学的なアプローチを採用してこなかったとルーマンは指摘する¹⁷⁾。

ルーマンは率直に、数学的道具立てを用いて語られたフォン・フェルス

ターの議論の宛先は自然科学者にあるようにみえると語る。したがって、社会学者にとって重要なのは、そのような議論から「回帰性」「固有价值」のような概念を社会学者は取り入れるべきなのか、取り入れるのだとしたらどのようなときにそうすればよいのか、という点だという。以下のルーマンの応答は、このような問いを起点としながら二つの問題について語るという流れをたどる。一つ目の問題は、認知（Kognition）についてである。これは、かつてルーマンがフォン・フェルスターに提示した認識の問題を想起させるが、後述するように、ここでは環境におけるシステムの存続可能性に対する認知の意義の転換が行われている。二つ目の問題は、観察と時間の問題である。この場合の時間は、不可逆的に進行する連続体のようなものではなく、過去と現在、現在と未来のたえざる区別によって構成されるものである。ルーマンは、この問題において時間次元における回帰的観察の社会的意義についてふれている。

さて、認知の問題についてであるが、ルーマンはこれをかつてのように認識の可能性の条件を問う（その意味で認識論的な）視点からではなく、システムの作動との関係から論じている。ヨーロッパの伝統においては、システムにとっての認知は、環境に関する正しい知識を取得することによって、環境におけるシステムの存続可能性を高めるものと考えられてきた。そうした能力は、とりわけ人間に帰属され、人間は自らの高い認知能力によってその環境に対する適応のチャンスを高めることができると考えられてきたわけである。このような見方には、正しい認知こそシステム存続の前提という考え方が含意されている。ルーマンは、このように認知をシステムの存続に先行させる見方を逆転する。つまり、システムの作動は継続しているかないかのいずれかであり、作動が継続している限りにおいて

17) 例えば、パーソンズは次のように述べている。構造-機能的分析は、「数学的技術的なツールやそれを用いるために必要な操作的、経験的な諸条件を導入せずに、システムにおける諸変数の力動的な相互依存を明確に分析しうる唯一の方法であるように思われる」（Parsons 1964:218）。

認知もまた可能となるということである。こうした逆転によって、むしろ認知能力に内在する限界に焦点が当てられることになる¹⁸⁾。

ルーマンの考えでは、システムの認知とは、ほんの一時的な環境との調和にすぎず、システムにできるのはそのような一時的な調和を繰り返し作り出そうとすることだけである。彼の言葉を引いておこう。「つまり、私がいいたいのは、本当に何が起きているかを我々は表象することができない、我々は世界を写し取ることもできない、我々が持つ能力は、環境において一時的に起きている出来事にシステムを調和させ、そうして再びそこから離れて、新たな認知的容量を充足する能力だということです」(Ofak und von Hilgers hrsg. 2010:48)。これは、認知というものが抱える基本的な無知を指摘するものである。社会的関係においてみた場合、このような基本的無知は、コミュニケーションのパートナーが不透明な他者として現れ、たえざるコミュニケーションを要請する基礎条件として作用する。これは、フォン・フェルスターが論じた非トリビアル・マシンの予測不可能性についてもいえる。つまり、コミュニケーションの水準で考えてみると、いずれにおいても回帰的なフィードバックを繰り返しつつ相互作用を積み重ねてゆくこと以外に何らかの「固有値」、いいかえれば反復的利用が可能なパターンを作り出すすべがないのである。

ルーマンが言及した第二の問題は、観察と時間の問題であった。ここで彼が述べているのは、回帰性は、フォン・フェルスターが機械のモデルを用いて示した「アウトプットがインプットになる」回路のような形式だけでなく、時間的な観察においてもみられる、ということである。それは、

18) 本文においても示唆したように、このような逆転の背景には、認知能力に人間の特性をみいだすヨーロッパの人間主義的伝統を見直そうというねらいがある。この伝統においては、人間と動物、人間と機械が区別され、いずれの場合でも後者には理性や反省能力が欠けているとして、人間が特別視される構図になっている。ルーマンは、こうした伝統的構図から認知能力の定式化を切り離そうとしたのである (Luhmann 1997:120-128=2009:126-135)。

観察者が現在と区別しながら過去を振り返ることであり、同様に現在と区別しながら未来において起きうるかもしれない変化を展望することである。このような観察の次元における回帰性をルーマンは「想像的な回帰性 (imaginäre Rukursivität)」と呼んでいる。フォン・フェルスターがこのような「回帰性」を回帰性の一つとして認めるかどうかはわからないが、ルーマンはフォン・フェルスターへの応答の締めくくりとして、認知における無知の問題とともに、このような時間的観察の導入を社会学が取り組むべき課題として挙げている。すでに述べたように、認知における基本的無知は、社会的関係の基礎条件でもある。自我はブラックボックスである他我の内部を見通すことはできないし、それどころか自我自身の内にすら不透明性を抱えている。このような自我が多数存在し、しかも同時に行動しているとき、そこにどのような調整可能性、いいかえれば社会秩序の形成可能性がみいだされるのだろうか。回帰的な相互作用の蓄積によって、というのが、フォン・フェルスターが示唆した（そしてルーマンも同意するであろう）一つの方途である。それに加えて、過去を振り返り、未来を展望する時間的な観察が、基本的な無知という条件のもとで現在における指針を獲得するもう一つの方途であるということを、ルーマンは強調したわけである。

4 コミュニケーションと人間

ルーマンの誕生日を記念して開かれたコロキウムにおけるフォン・フェルスターとルーマンの対話を振り返ってきたが、最後に両者の所説を比較し、両者の相違点についてふれたうえで、コミュニケーションをめぐって我々に残された問いについて述べることにしたい。すでにフォン・フェルスターのために行った講演においてルーマン自身が言及していることであるが (Luhmann 1991:73)、フォン・フェルスターは社会システムについて考える際に人間個人を単位とするモデルから離れることはなく、ルーマン

がしたように社会システム（つまり、コミュニケーションのシステム）に一つの観察者としての地位を認めることはなかった。ルーマンもまた、コミュニケーションが人間の身体や意識過程なしに存立しえないことを繰り返し述べているが、フォン・フェルスターとは異なり、コミュニケーションのシステムに固有の自律性をみいだしたのである。

このような両者の差異をもたらしているのが、帰属の問題である。フォン・フェルスターは、講演の準備のために行った自らの試行錯誤について語り、聴衆と当意即妙のコミュニケーションを演じてみせ、コミュニケーションの回帰性を自らの行為として示した。彼のこのようなパフォーマンスは、回帰的に作動する非トリビアル・マシンの動きは因果関係によっては説明できず、それゆえにその機械のふるまいはその機械自体に帰属（倫理的ない方をすれば帰責）するしかない、という認識に即したのもであった。フォン・フェルスターは、非トリビアル・マシンの回帰的な相互作用であるコミュニケーションを、そのような帰属の担い手たる人間の営みとして描こうとしたのである。ルーマンもまた、コミュニケーションのシステムを理論的に記述する際に、出発点として二つの情報処理装置の相互関係に言及している。社会システムの「基底的过程の水準における自己言及が可能なのは、少なくとも二つの情報処理装置 (Prozessoren) が存在し、それらが相互に関係し、かつ他方の装置を介してそれ自体と関係することができる場合に限られる」(Luhmann 1984:191=1993:215)。ここで述べられている二つの情報処理装置の相互関係がコミュニケーションの基礎的条件であることについては、フォン・フェルスターも同意するであろう。しかし、ルーマンはそのような相互関係においてなされる選択が、もっぱらそのような情報処理装置（この場合は、人間）にのみ帰属されるとは考えなかったのである。

ルーマンは、人間にのみ行為の選択を帰属できるという考え方を「先入観」と呼び、次のように述べている。「この先入観の核心は、個々の具体的な人間に行為を帰属させることに存している。それはあたかも、行為の

『エージェント』としてつねに一人の人間、しかもまるごとの人間が不可欠であると考えられているかのようである。行為が可能になるための物理的、化学的、熱学的、有機体的、心的な諸条件が存していることは自明のことであるが、だからといって、個々の具体的な人間にのみ行為を帰属できる、ということにはならない。というのも、実際のところ行為は、個々の人間の過去によってはけっして完全には決定されないからである」(Luhmann 1984:229=1993:262)。行為過程は個々人の過去のふるまいによって決定されているわけではないというルーマンの認識は、非トリビアル・マシンの処理においては固有値が作り出された原因を特定できないとするフォン・フェルスターの認識を想起させる。しかし、ルーマンはそこから「行為」の社会的構成に目を転じることでフォン・フェルスターとは異なる理路を辿る。「行為は、帰属過程をとおして構成される」(Luhmann 1984:228=1993:261)。例えば、「動機」、「意図」、「利害関心」といった社会的に慣用される観察図式を用いて、ある個人がどのような理由である選択を行ったのかについて描かれるとき、そのような行為の描写はコミュニケーションという社会的な過程において行われる。つまり、人間への「行為」の帰属そのものがコミュニケーションの水準で行われていると考えるわけである。次の一節で述べられている「自己観察」とは、コミュニケーション過程において行われる当のコミュニケーション過程に対する再帰的な観察のことである。「社会システムにおける個々の行為の継続的な産出は、〔その社会システムにおいて〕同時に進行している自己観察の遂行として把握するのがもっともよい。この自己観察によって、〔行為というコミュニケーションの〕要素的な統一体に輪郭が与えられ、それによって〔先行する行為に対して後続の〕行為を接続するための支点がもたらされるのである」(Luhmann 1984:229-230=1993:263)。こうしてルーマンは、コミュニケーションという社会的な過程に「行為」を構成する一つの自律性をみいだしたのだが、フォン・フェルスターはこのような社会的な構成過程を「発見」することはなかったのである。

コミュニケーションの回帰性をめぐってルーマンとフォン・フェルスターによって行われた対話からおおよそ30年が経過した現在、当時直接的には論究されなかったものの、両者の理論枠組みに内在する一つの問いが浮かび上がる。それは、あらためてコミュニケーションにおける帰属の問題である。フォン・フェルスターは、選択の帰属によっていわば自由で責任ある「人間」を回復し、ルーマンは人間への帰属を介した「行為」の構成をコミュニケーションのはたらきに帰したのである。その意味で、ルーマンはコミュニケーションの担い手を人間以外のもの（この場合は社会的な過程としてのコミュニケーションそれ自体）に拡張しているわけだが、フォン・フェルスターのモデルもまた人間以外のものを非トリビアル・マシーンとみなすことで同様の拡張が可能である。もしかりに人間ではないが、その対象に判断力、意志、感情がみとれ、それらをその対象に帰属する以外に扱う方法が見つからない場合、我々はその対象とコミュニケーションしている、ということになるのだろうか。また、こうした「人間らしさ」を基準としてコミュニケーションのパートナーをみいだす発想自体に限界はないのだろうか。近年では、人工知能における「シンギュラリティ」の実現可能性をめぐって活発に議論が行われているが、技術的な実現の可否は別として、人工知能に関する議論の進展は、コミュニケーションにとどまらず、社会、そして人間をめぐる基本的な問いをあらためて提起する。あるいは、デリダを想起していえば、（人間にまなごしを投げかけてくる動物をも含めた）「他者」の問題に我々を引き寄せる。コミュニケーションの回帰性をめぐって交わされたフォン・フェルスターとルーマンの対話は、今世紀的なコンテキストのもとで、こうした諸問題について考え続けることを我々に促している。

文 献

赤堀三郎, 2017, 「ソシオサイバネティクス」日本社会学会理論応用事典刊行委員会編『社会学理論応用事典』丸善出版, 468-469。

- 赤堀三郎, 2021, 『社会学的システム理論の軌跡——ソシオサイバネティクスとニクラス・ルーマン』 春風社。
- Baecker, D., 2005, *Form und Formen der Kommunikation*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Esposito, E., 1993, "Introduzione," *Teoria Sociologica*, 2: 7-18.
- von Foerster, H., 1993, "Für Niklas Luhmann: Wie rekursiv ist Kommunikation?," *Teoria Sociologica*, 2: 61-84.
- von Foerster, H., 2003a, "For Niklas Luhmann: 'How Recursive is Communication?'," Heinz von Foerster, *Understanding Understanding*, New York: Springer, 305-323.
- von Foerster, H., 2003b, "Cybernetics of Cybernetics," Heinz von Foerster, *Understanding Understanding*, New York: Springer, 283-286.
- Lévi-Strauss, C., 1958, *Anthropologie Structurale*, Paris: Librairie Plon. (荒川幾男ほか訳, 1972, 『構造人類学』 みすず書房。)
- Luhmann, N., 1982, "Konflikt und Rechtsnorm," 『比較法雑誌』 17(1):53-67. (土方昭監修, 1983, 『システム理論のパラダイム転換——N・ルーマン日本講演集』 御茶の水書房, 63-75。)
- Luhmann, N., 1984, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*. Frankfurt am Main: Suhrkamp. (佐藤勉監訳, 1993, 1995, 『社会システム理論 上・下』 恒星社厚生閣。)
- Luhmann, N., 1991, "Wie lassen sich latente Strukturen beobachten?," Paul Watzlawick und Peter Krieg (Hrsg.), *Das Auge des Betrachters: Beiträge zum Konstruktivismus. Festschrift für Heinz von Foerster*, München/Zürich: Piper, S.61-74.
- Luhmann, N., 1993a, "Antwort auf Heinz von Foerster," *Teoria Sociologica*, 2: 85-88.
- Luhmann, N., 1993b, "Deconstruction as Second-Order Observing," *New Literary History*, 24(4): 763-782.
- Luhmann, N., 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, 2bde., Frankfurt am Main: Suhrkamp. (馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳, 2009, 『社会の社会 1・2』 法政大学出版局。)
- Merton, R. K., 1957, *Social Theory and Social Structure*, New York: Free Press. (森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳, 1961, 『社会理論と社会構造』

みすず書房。)

- Ofak, A. und P. von Hilgers (Hrsg.), 2010, *Rekursionen: Von Faltungen des Wissens*, München: W. Fink.
- Parsons, T., 1951, *The Social System*, London: Free Press of Glencoe. (佐藤勉訳, 1974, 『社会大系論』青木書店。)
- Parsons, T., 1964, *Essays in Sociological Theory revised edition*, New York: Free Press.
- Ruesch, J. and G. Bateson, 1951, *Communication: The Social Matrix of Psychiatry*, New York: W. W. Norton & Company. (佐藤悦子・R. ポズバーグ訳, 1995, 『精神のコミュニケーション』新思索社。)
- Shannon, C. E. and W. Weaver, 1998, *The Mathematical Theory of Communication*, Urbana: University of Illinois Press. (植松友彦訳, 2009, 『通信の数学的理論』ちくま学芸文庫。)
- Spencer-Brown, G., 1969, *Laws of Form*, London: Allen & Unwin. (大澤真幸・宮台信司訳, 1986, 『形式の法則』朝日出版社。)
- 高橋徹, 2000, 「コミュニケーションの変転——そのポテンシャルをめぐる理論史的考察」『社会学研究』63:75-95。
- 高橋徹, 2021, 「『形式』としてのニュース——D・ベッカーのコミュニケーション理論とジャーナリズム」『法学新報』127 (9/10):145-169。
- Thyssen, O., 1999, “Memories of Luhmann”, Theodor M. Bardmann und Dirk Baecker (Hrsg.), »Gibt es eigentlichden Berliner Zoo noch?«: *Erinnerungen an Niklas Luhmann*, Konstanz: UVK, 143-158.
- Watzlawick, P. and J. H. Beavin, D. D. Jackson, 1967, *Pragmatics of Human Communication: A Study of Interactional Patterns, Pahtologies, and Paradoxes*, New York: W. W. Norton & Company. (山本和郎監訳, 1998, 『人間コミュニケーションの語用論』二瓶社。)
- Zentrum für interdisziplinäre Forschung, 1993, *ZiF 1968-1993. Daten aus 25 Jahren Forschung*, Bielefeld.
- Zentrum für interdisziplinäre Forschung, 1994, *Jahresbericht ZiF: 92/93*, Bielefeld.

付記

この研究は、中央大学特別研究期間制度の支援を受けて行われた。記して謝意を表したい。

（本学法学部教授）